

【論文】

ウィリアム・ユースト・グラッドストンの神学と政治

Theology and Politics of William Ewart Gladstone

竹内 真人
TAKEUCHI Mahito

目次

- 1 はじめに
- 2 ジェントルマン理念への道—福音主義から高教会主義へ—
- 3 福音主義と自由主義的政策転換
- 4 自由主義的統治の諸相
- 5 おわりに

(要旨)

ウィリアム・ユースト・グラッドストンは、19世紀イギリスの代表的政治家であり、キリスト教神学を政治に反映させようとした人物であった。本稿は、グラッドストンの神学思想を分析し、彼がなぜ自由主義的政策転換を行ったのか、また彼が構想した自由主義的統治とはいかなるものであったのかを考察したものである。グラッドストンは幼年期の福音主義を脱却し、『教会との関係における国家』で示された高教会主義を信奉するようになった。とはいえ、彼は福音主義の影響を受け続けていた。彼は聖アウグスティヌスの教義を受容し、「カトリック的福音主義」の立場をとるようになった。特にメイヌース学院事件以降、グラッドストンはジョセフ・バトラー主教の福音主義的教義の影響を受け、自由主義的政策転換を行うようになった。彼はバトラー主教が主張する「神の道徳的統治」を実現しようと試みたのである。本稿では、グラッドストンの自由主義的統治が、個人の良心を重視し、神は個人の行為の善悪に従って褒賞と懲罰を与えるという「神の摂理」を重視するものであったという解釈を提示している。

1 はじめに

本稿は、19世紀イギリスの代表的なジェントルマン・エリートであり、イギリス首相でもあったウィリアム・ユーアト・グラッドストーン (William Ewart Gladstone, 1809年～1898年) が抱いた神学思想と彼の自由主義的統治がいかなるものであり、それらがどのような関係にあったのかを具体的に考察しようとするものである。その際、本稿では、グラッドストーンが抱いた神学思想が一つではなく、福音主義 (Evangelicalism) と高教会主義 (High Church) という相対立する神学思想であったことに注目したい。

まず初めに、福音主義と高教会主義について簡単に説明しておこう。

福音主義とは、1730年代以降の英米の「福音復興運動 (Evangelical Revival)」によって拡大した禁欲的プロテスタンティズムのことである。儀式に依存せず、キリストの贖罪を信じ、聖書や説教によって得られる神の救いを強調するものであった。マックス・ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』のなかで強調したように、福音主義は、人間を規律化 (機械化・生産力化) するイデオロギー的意味作用を持つものであり、その諸教派には、英国教会低教会派だけでなく、会衆派、スコットランド長老派、バプティスト派、メソヂスト派、クエーカー派といった多様な非国教会系諸教派が含まれていた (ヴェーバー (大塚久雄訳), 1989; 竹内, 2015, pp. 44, 49)。

一方、高教会主義は、英国教会の一教派であり、教会の権威 (すなわち主教による使徒継承) や聖礼典 (洗礼と聖餐) といった儀式を重視した。カトリックと似ていたため、アングロ・カトリシズムとも呼ばれた。高教会主義は、理神論を主張した広教会主義 (Broad Church) と共に、ジェントルマン・エリートが信奉したジェントルマン理念を神学的に

構成していた。このジェントルマン理念は、ルネサンスの人文主義に基づく教養主義、すなわちジェントルマン為政者の知的教養を重視するものであった (竹内, 2015, p. 42)。

本稿では、グラッドストーンがこれらの相対立する二つの神学思想の間をいかに揺れ動き、自由主義的政策転換を遂げるに至ったのか、また彼が構想した自由主義的統治とはいかなるものであったのかを解明する。まず、先行研究を簡単に振り返っておこう。グラッドストンの神学と政治に関する先行研究を回顧すると、ボイド・ヒルトンとデイヴィッド・ベピントンの見解が鋭く対立していることがわかる。ヒルトンは、メイヌース学院事件以後にグラッドストーンがジョセフ・バトラー (Joseph Butler) 主教の福音主義的教義の影響を受け、幼少期の福音主義に回帰したと主張した (Hilton, 1983; Hilton, 1986)。一方、ベピントンはこのヒルトンの主張を批判し、グラッドストーンがメイヌース学院事件以後に福音主義ではなく広教会主義に近づいたと主張した (Bebbington, 2004)。本稿は、グラッドストーンが聖アウグスティヌスの教義を受容して高教会主義と福音主義を両立する立場をとっていたという観点から、ヒルトンの主張を支持し、グラッドストーンがメイヌース学院事件以後に広教会主義に近づいたというベピントンの主張を批判する。次章では、グラッドストーンが彼の幼少期の福音主義の立場からいかに脱却し、高教会主義というジェントルマン理念に同化するようになったのかについて考察することしよう。

2 ジェントルマン理念への道—福音主義から高教会主義へ—

(1) 幼少期の福音主義

グラッドストーンは彼の幼少期の家庭環境を「厳格な福音主義」と描写した。とはいえ、多くの回想がそうであるように、それは現実

を単純化しすぎたものであった。というのも、グラッドストンの家族が福音主義を信奉していたのは、彼らがスコットランド出身であり、スコットランド長老派と近い信条を抱いていたからに過ぎなかったからである (Butler, 1982, p. 9)。

グラッドストンの父親のジョン・グラッドストンは、リース出身の商人であったトーマス・グラッドストンの息子であり、裕福なリヴァプール商人であった。しかし、彼は彼の父親の厳格な福音主義的信仰を継承しなかった。例えば、「クラパム派」に代表される厳格な福音主義者たちは奴隷貿易廃止運動を熱心に展開したが、ジョン・グラッドストンはそうした福音主義を捨て去り、西インド貿易に手をのぼすだけでなく、彼が所有した大農園で黒人奴隷を使役していた (Butler, 1982, p. 9-11; 神川, 2011, p. 21)。

こうした父親の影響で、グラッドストン自身が抱いていた福音主義も厳格なものにはならなかった。グラッドストンは、イートン校やオックスフォード大学の学生であった時に、彼の学友の貴族的で教養のある家庭環境と彼自身の商人的な家庭環境との間に格差を感じ、嘲笑の的になるのを恐れて、彼の家族の福音主義的信仰を隠していた。とはいえ、オックスフォード大学在学中 (1828年～1831年) は、福音主義的信仰を維持していた。彼が信奉していた福音主義は神の恩恵の普遍性と人間の自由意志を強調する穏健的なものであり、神の恩恵を信じる者は救われるが、信じない者は救われないと考えるものであった。それは、神が人間の意志とは無関係に「救われる者」と「救われぬ者」を選んでいるという予定説を強調した高度カルヴィニズム (high Calvinism) とは本質的に異なっていたが、穏健的カルヴィニズムの影響を受けたものであった (Butler, 1982, pp. 18, 23, 26, 27)。

(2) 福音主義から高教会主義へ

グラッドストンが福音主義を拒絶して高教会主義を信奉するようになったのは、1830年代頃のことであった。彼が福音主義を拒絶するようになった原因は、彼自身の穏健的な福音主義とは異なるペンテコステ派の極端な福音主義が流行し、それに彼が違和感を覚えるようになったからであった。その後、彼は、福音主義とは組織的に対立していた高教会主義の献身的なメンバーになった (Butler, 1982, pp. 49-50; Hilton, 1983, p. 30; Hilton, 1986, p. 340)。

とはいえ、彼は1830年代に流行したオックスフォード運動からは一定の距離を置いていた。オックスフォード運動は、英国教会内のカトリック的要素の復活によって教会の権威回復を目指したもので、福音主義に対する反動であった。その指導者は、オックスフォード大学のオリエル・カレッジに集ったエドワード・ブーヴェリー・ピュージ、リチャード・ハーレル・フルード、ジョン・ヘンリ・ニューマン、ジョン・キーブル、ロバート・アイザック・ウィルバーフォースらであり、1833年から1841年まで「時局小冊子 (*Tracts for the Times*)」を出版したため、トラクト運動とも呼ばれた (竹内, 2015, p. 43)。グラッドストンは「ピュージ主義者」と称されることもあったが、彼自身はオックスフォード運動の支持者であることを否定していた。というのも、彼はオックスフォード運動が始まる前にオックスフォード大学を卒業しており、オックスフォード運動の神学的影響を受けていなかったからである (Butler, 1982, pp. 157, 167, 169)。彼は「国家は邪悪であり、教会には値しない」というフルードの主張を拒絶していたし、彼にとってオックスフォード運動は、福音主義に対する反動というよりも、むしろ福音主義を補完するものであった (Schreuder, 1979, pp. 75-76; Butler, 1982, pp. 164-165)。

(3) 『教会との関係における国家』

グラッドストーンは1838年に『教会との関係における国家』を出版した(Gladstone, 1839)。それは、福音主義者であるエディンバラ大学の神学教授トーマス・チャーマーズ博士に対する反論書であり、高教会主義者としてのグラッドストンの立場を確立するものであった。チャーマーズは1838年に行われたロンドンでの講演において次のように述べた。国家というものは、教義上の細目に関与すべきではない。国家は、純粹でけがれない神の言葉である一定の形のプロテスタントイイズムを国教とし、それに金を与え、人間の言葉によって不純となった神の言葉であるローマ教会に対して鉄のごとく反対すれば良い。この説明に対して、グラッドストーンは極めて不満であった。彼は、チャーマーズが地上における教会の原理や使徒継承について直視したことがないと判断し、二カ月たらずのうちに『教会との関係における国家』を書き上げたのである(神川, 2011, pp. 81-82; Hilton, 1986, pp. 340-341)。その論旨は次の通りであった。国家は、人間と同様に、良心を持たなければならない。良心は一つであり、国家は宗教における真理と虚偽を峻別する責務を負う。英国教会は、イギリス国家の一つしかありうべからざる良心である。それゆえ、国家は、ローマ教会と同様に直接的な使徒継承を持ち、しかもローマ教会よりも純粹な教会である英国教会に対して、積極的かつ排他的に、金銭上その他の支持を与えなければならない(神川, 2011, p. 82; Butler, 1982, pp. 79-80; Stephen, 1961, p. 219)。『教会との関係における国家』は、グラッドストンの保守主義(Toryism)のマニフェストであり、国教という概念を擁護したものであった(Butler, 1982, pp. 77, 79)。空想的で神経を張りつめた英国教会の若い理想主義者であったグラッドストーンは、国家と英国教会の融合によって、英国教会の理想郷が創出され

ると主張した(Schreuder, 1979, pp. 73-74)。すなわち、彼は国家と英国教会の調和を強調したのである(Butler, 1982, p. 81)。

『教会との関係における国家』は、グラッドストーンが福音主義の教義を一時的に捨て去ったことを示していた。というのも、同書は、すべての個人が良心を持つことを否定していたからである。同書は次のように主張した。個人は道徳的に墮落しているから、国民は、個人としてではなく、国家の活発な生命力の構成要素と見做されなくてはならない。すべての個人が道徳的感受性を得ることができるのは、国家の良心である英国教会と有機的に融合することによってのみなのである(Hilton, 1983, p. 31)。それゆえ、『教会との関係における国家』においては、英国教会の利益と対立した非国教徒の福音主義者たちが一方的に批判されることになった(Butler, 1982, p. 84)。

オックスフォード運動の指導者であったジョン・キーブルが指摘したように、『教会との関係における国家』の欠点は、グラッドストンの願望のみが語られていたことにあった。グラッドストーンは、英国教会を軽視することもある国家の政治的現実から目を背けていたのである。それゆえ、グラッドストンの政治的上司であったピールは同書にぎっと目を通すと、それを投げ捨て、「あの青年は、こんなくだらないものを書いていたら、政治家としての輝かしい生涯をだめにしてしまうだろう」と述べた(Butler, 1982, pp. 86, 88, 91; 尾鍋, 2018, pp. 62-63)。

このように、グラッドストーンは1830年代頃に福音主義から離れて高教会主義を信奉するようになった。次章では、グラッドストーンが自由主義的政策転換を行った原因が、福音主義、とりわけジョセフ・バトラー主教の神学思想にあったことを明らかにすることしよう。

3 福音主義と自由主義的政策転換

(1) 福音主義への執着と聖アウグスティヌスの教義

既に述べたように、グラッドストーンは、福音主義の教義を一時的に拒絶し、高教会主義を信奉するようになった。しかし、いまだにいくつかの福音主義の中心的教義には執着していた。神の摂理、罪、回心、良心、キリストの贖罪、救済、審判といった福音主義の教義は、グラッドストンの心から一時も離れることがなかったのである (Hilton, 1983, p. 31; Hilton, 1986, p. 340)。

グラッドストーンが高教会主義を信奉しながら福音主義の教義に執着できた原因は、彼が学んだ聖アウグスティヌスの教義にあった。なぜなら、聖アウグスティヌスの教義は、高教会主義の教義だけでなく、福音主義の教義をも含んでいたからである (Bebbington, 2004, p. 75)。それゆえ、グラッドストーンは、聖アウグスティヌスの教義を信奉することによって、高教会主義の教義だけでなく、福音主義の教義も維持することができた。聖アウグスティヌスの教義は、高教会主義と福音主義の源流としての古典的意義を持つ教義であったのである (Butler, 1982, p. 52)。

こうして、グラッドストンの神学思想は、聖アウグスティヌスの教義を信奉することによって、福音主義の基盤にアングロ・カトリシズムの容姿が加えられたものに進化することになった。それは、セントアンドリュース主教であったジョージ・ウィルキンソンが唱導した「カトリック的福音主義 (Catholic Evangelicalism)」と似たものになり、個人的な回心の必要性和アングロ・カトリシズムの聖礼典主義が統合されたものになった。今や、グラッドストンの神学思想は、福音主義の救済論に、カトリックの教会論が結びつけられたものになったのである (Butler, 1982, pp. 56, 158-159, 163)。

(2) 高教会主義的理想の挫折—メイヌース学院事件—

グラッドストーンが『教会との関係における国家』で示された考えを捨て去るようになったのは、1841年からのピール内閣での経験によるものであった。グラッドストーンは1841年に商工政務次官、1843年に商工大臣になったが、そこで経験した政治的现实によって、彼の高教会主義的理想が実現不可能であることを認識するようになった (Butler, 1982, pp. 93, 96)。

転機となったのは、メイヌース学院事件であった。まず、その事件の概要について説明しておこう。イギリス政府にとってアイルランドはつねに懸念の対象であった。アイルランド人の不満を解消するため、ピールはアイルランド宥和政策をとるようになり、カトリック僧侶の養成所であるダブリンのメイヌース学院に対して1800年以来毎年与えられていた9000ポンドの補助金を2万ポンドに増額する案を1844年に提案した。グラッドストーンは、この施策は正当であり、かつ賢明なものであると認識していたが、先述の著書『教会との関係における国家』の中ではメイヌース学院への9000ポンドの補助金を批判していた。なぜなら、この施策は、国家に二つ以上の宗教を援助する権利と義務を認めるものであったからである。それゆえ、彼は、ピールの施策に公然と賛成することは、彼が『教会との関係における国家』の中で述べたこととはくいちがうと考えるようになり、1845年2月に、誠実を守るために、商工大臣の辞任を申し出たのである。これは、彼の高教会主義的な宗教理論が現実政治の場では実現不可能であることを示す出来事であった (神川, 2011, pp. 113-114; 尾鍋, 2018, p. 78-79; Butler, 1982, pp. 95, 112-113; Schreuder, 1979, pp. 104-105)。

こうして、グラッドストンの宗教理論は砂上の楼閣のごとく崩れ去ることになった。グ

ラッドストーンは、彼が『教会との関係における国家』の中で主張した国家が現実には存在しないことを認識するようになった。『教会との関係における国家』は壮大な誤りであり、メイヌース学院事件以降、グラッドストーンは英国教会と国家の関係について考察することを避けるようになった。なぜなら、国家は良心を持たないことが明らかとなったからである (Butler, 1982, pp. 120-121, 130; Schreuder, 1979, pp. 77-78, 118)。

(3) バトラー主教と福音主義への回帰

国家が良心を持たないとするならば、どこに良心を求めればよいのだろうか。それは、メイヌース学院事件以降のグラッドストンの心を占めた大きな問題であった。既に述べたように、グラッドストーンは『教会との関係における国家』の中で、すべての個人が良心を持つという福音主義の教義を一時的に捨て去っていた。しかし、メイヌース学院事件によって『教会との関係における国家』での主張が誤りであることが明らかになると、すべての個人が良心を持つという福音主義の教義を再発見するようになった。そのきっかけとなったのが、ジョセフ・バトラー主教 (1692年～1752年) の著作に他ならなかった。

まず、バトラーの生涯について簡単に紹介しておこう。バトラーは1692年5月にイギリス南部のパークシャー州のウォンテッジに裕福な布商人の末っ子として生まれた。当時、父親は既に引退していたが、彼は息子を長老派の牧師にするつもりでグロスターの非国教会系の学校に入れた。バトラーがこの学校で受けた長老派非国教徒としての教育は、彼の精神的枠組の形成に大きな影響力を持っていた。だが、後にバトラーは国教会に所属することを決心し、父親を説得し、1714年にオックスフォード大学のオリエル・カレッジに入学した。1718年に学士号を取得すると、聖職者としての道を歩み始め、1726年に『ロ

ウルズ・チャペル説教集』 (*Fifteen Sermons preached at the Rolls Chapel*) を出版した。これは1719年以降、ロンドンのロウルズ・チャペルで行った15篇の説教をまとめたものであった。その10年後の1736年には有名な『自然宗教および啓示宗教の、自然の構造と過程に対する類比』 (*The Analogy of Religion, Natural and Revealed, to the Constitution and Course of Nature*, 以下、『宗教の類比』と略記) を刊行している。その後、1738年にブリストルの主教として赴任し、1740年にはセント・ポール寺院の主任主教に任命された。そして最後に1750年にグラムの主教の地位を得て、1752年6月にバースで逝去した (植木, 1985, p. 119; 板橋, 1986, p. 133; 佐々木, 1993, pp. 29-31)。

グラッドストーンは、オックスフォード大学の学生であった1830～31年に、このバトラーの『宗教の類比』を読んだが、『ロウルズ・チャペル説教集』の倫理的な心理学に最初には不快感を抱いた。グラッドストーンがバトラーの著作を受け入れるようになるのは、聖アウグスティヌスの教義を信奉するようになってからであった。そして、メイヌース学院事件直後の1845年6～7月の間に、グラッドストーンはバトラーの著作を体系的に読み直し、バトラーの著作に取り憑かれるようになった (Hilton, 1983, p. 33; Hilton, 1986, p. 342)。

グラッドストーンがバトラーの著作に取り憑かれるようになったのは、すべての個人が良心を持つという福音主義の教義を再発見したからであった。バトラーの道徳哲学の中心的教義は、すべての個人は良心と呼ばれる至高の監督する能力を持っているというものであり、蓋然性は人生の指針であるというバトラーの教義はグラッドストンのすべての政治分析のテーマとなった。バトラーはグラッドストンの「人生の指針」となり、グラッドストーンは「バトラーがいかにかに忠告したかを考えることなしに、私は人生を一歩も歩むこ

とができない」と述べた。1896年には、グラッドストンはバトラーの著作を編集し、『バトラー主教の著作の補助的研究』(*Studies Subsidiary to the Works of Bishop Butler*)を出版した(Hilton, 1983, pp. 33, 39; Hilton, 1986, p. 342)。

バトラーの神学が19世紀初頭の福音主義と対立していたと考えることは正しくない。ウィリアム・ウィルバーフォースやトーマス・チャーマーズらの代表的な福音主義者たちは全員バトラー主義者として知られていたし、グラッドストンも『バトラー主教の著作の補助的研究』の中で、バトラーの著作が、「福音主義の特色や宗教的熱情」を欠いていたとはいえ、福音主義の教義と不可分であったことを強調していた。グラッドストンにとってバトラーの著作は、『教会との関係における国家』で示された理念が崩れ去った後で、福音主義への命綱を提供するものであったのである(Hilton, 1983, p. 34; Gladstone, 1896, p. 113)。

実際、グラッドストンが福音主義という彼の宗教的起源に回帰できるようになったのは、バトラーの著作のおかげであった。グラッドストンは、バトラーが「私の幼少期の狭い福音主義から私を解放してくれた」と述べたが、それは、神が神の恩恵を聞かない人々を永遠の地獄行きに予定しているというカルヴィニズムの教えから解放され、アルミニウス派の穏健的福音主義に近づく道を、バトラーの著作が明確に示していたことを意味していた(Hilton, 1986, p. 342; Hilton, 1983, pp. 31, 33-34)。デイヴィッド・ベビントンは、メイヌース学院事件の後でグラッドストンが福音主義という宗教的起源に回帰したというヒルトンの主張を批判し、グラッドストンが理神論的な広教会主義を信奉するようになったと主張したが(Bebbington, 2004, p. 104)、このベビントンの考えは極めて疑わしい。なぜなら、コリン・マシューも指摘したよう

に、グラッドストンが広教会主義の哲学的思索を心から信用しなかったのは明らかであるからである(Matthew, 1997, p. 260)。つまり、グラッドストンは、広教会主義を信奉するようになったのではなく、神の恩恵の普遍性と人間の自由意志を強調する穏健的な福音主義に回帰するようになったのである。

(4) 自由主義的政策転換

このように、グラッドストンはバトラーの著作によって、すべての個人が良心を持つという福音主義の教義を再発見するようになった。その過程はグラッドストンがピール派の自由主義者になる過程と一致していた。グラッドストンは、『教会との関係における国家』のなかで示された、国家が個人に道徳を与えるという考えを一変させるようになり、個人が国家に道徳を与えると考えるようになった(Hilton, 1983, p. 32; Hilton, 1986, p. 341)。グラッドストンは、バトラーの福音主義的教義の影響で、自由主義的政策転換を行うようになったのである。

良心とは、個人が行為する際にその善悪を判断する感覚であり(Schreuder, 1979, pp. 79-80)、神はその行為の善悪に従って褒賞と懲罰を与える。この考えは、グラッドストンがバトラーの著作から学んだことであり、グラッドストンの自由主義の中核を占めた「神の摂理」という考えに他ならなかった。グラッドストンにとって、神は「空気や雲のなかに漂う単なる抽象的な観念」ではなく、神聖な「神の道徳的統治力」であり(Hilton, 1986, pp. 345-346)、それゆえ、この神の道徳的統治の原則は公的な生活だけでなく私的な生活にも及んだ。人間の栄枯盛衰は神の計らいによって形成されると考えられ、戦争や侵略や専制政治といった災いは国民やその支配者の道徳的過ちに対する神の懲罰であると解釈されるようになった。例えば、アイルランド飢饉のような政治的・社会的な大変動や惨劇で

さえも、神意によるものと見做されるようになったのである (Schreuder, 1979, p. 80)。このような考え方が、福音主義者たちだけではなく、グラッドストーンにも共有されるようになっていたのである。

つまり、神は、救済された魂を単に受け入れるだけではなく、社会の進歩を指導している。こうした「神の摂理」という考え方を受け入れることこそが、自由主義者になるということであった (Hilton, 1986, p. 343)。グラッドストーンはそう考え、『バトラー主教の著作の補助的研究』のなかでは次の点を強調した。すなわち、それぞれの社会の段階は「神の計画のあらわれ」であるということである (Gladstone, 1896, p. 305)。

自由主義時代には、重商主義時代とは異なり、そうした神の摂理を尊重する新たな政策が求められるようになった。具体的には、自由放任主義(レッセフェール)、自由貿易主義、そして選挙法改正といった新たな施策であった (Schreuder, 1979, pp. 93-94; Hilton, 1983, p. 28)。そこで重視されていたのは、国家ではなく、個人の良心であった。グラッドストーンは、一国の良心を、国家にではなく、尊敬されるべき大衆に求めたが (Hilton, 1983, p. 28)、それは、グラッドストーンがトーリー主義を捨てて自由主義に転換したことを意味していた。人間の幸と不幸が左右されるのは、国家の良心によってではなく、個人の良心によってである。また、近代社会の重大な問題が解決されるのは、国家によってではなく、活気づけられた道徳的世論によってである。したがって、重要なのは国民の道徳的進歩を促すことだということである (Schreuder, 1979, pp. 84-85, 94-95, 101)。つまり、グラッドストーンにとって真理への確実な指針となったのは、英国教会の教義よりも、大多数の意思に他ならなかったのである。

次章では、グラッドストーンが構想した自由主義的統治が「神の道徳的統治 (Moral

Government of God)」というバトラー主教の神学思想に基づくものであったことを明らかにすることにしよう。

4 自由主義的統治の諸相

(1) 福音主義と規律化

「福音主義は貨幣を獲得する営みと一致していた」とグラッドストーンが述べたように (Jenkins, 1995, p. 31)、福音主義は人間を規律化し生産力化するイデオロギー作用を持つものであった。1730年代以降の英米で「福音復興運動」を牽引し、福音主義を神学的に確立させた人物は、ジョナサン・エドワーズとジョン・ウェスリーであったが、その両者ともにまず強調したのは、回心の重要性であった。エドワーズは1741年にマサチューセッツ州エンフィールドで『怒れる神の御手の中にある罪人』という有名な説教を行ったが、それは会衆を回心させ、会衆の心を支配するためであった。原罪を負った人間は、神の御手の中にある細い糸で地獄の真上に吊るされている。人間を地獄に落ちないようにしているのは、神の御手でしかない。もしあなたが悔い改めなければ、神はその御手を放し、あなたを地獄の業火の中に投げ込んでしまうだろう。同様の説教はウェスリーの野外説教においても行われ、会衆は恐怖のあまり、うめき、叫び、涙を流し、けいれんを起こした。彼らは、キリストの恩恵は今や普遍的に与えられているが、悔い改めない者は必ず地獄に落ちると説教し、会衆を回心させたのである (エドワーズ (飯島徹訳), 1991; 竹内, 2015, p. 48)。

福音主義の信仰は、このような回心によって始まり、十字架の力で支えられ、聖書を読むことで培われ、その後の精力的な宣教運動を生み出すものであったが (Bebbington, 1989, pp. 2-3)、なかでも最も重要視されていたのが規律的な信仰生活であった。回心者は

自己を規律化して罪なき状態に到達しなければならぬが、特に近代の資本主義を支える規律的行為に駆り立てられねばならぬ。そのように福音主義者によって説教されたのである。例えば、エドワーズは、恵みに満ちた聖なる情感は勤勉で従順な職業労働に結実すると説いたし、ウェスリーも、できるだけ利得し、できるだけ節約する者は、できるだけ他に与えなければならぬと主張した。すなわち、彼らが述べた福音主義イデオロギーは、マックス・ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』のなかで主張したように、職業労働に駆り立てるためのイデオロギーだったのである（ウェスレー（大宮溥訳）、1974、pp. 179-197; 竹内、2015、pp. 47, 48-49）。こうして、福音主義イデオロギーは、ウェスリーのメソディスト派において明らかであったように、労働者階級の人々に対して特に強く作用することになった。例えば、18世紀後半のメソディスト信者の職業構成を調べてみると、57.5%が熟練労働者であり、16.9%が不熟練労働者や奉公人や貧民であった。それに対し、9.4%が商人やその他の雇用者であり、極少数が貴族やジェントリーであった。このことから、メソディスト信者のなかで労働者階級の比率が大きかったことは明らかであろう（Ditchfield、1998、p. 65）。E・P・トムスンが『イングランド労働者階級の形成』のなかで指摘したように、メソディスト派の教義は労働のためのイデオロギーであり、人間はそのような福音主義イデオロギーによって規律化されるようになったのである（トムスン（市橋秀夫・芳賀健一訳）、2003、pp. 429-431）。

(2) 神の道徳的統治

福音主義によって規律化された人々に対する神の道徳的統治を、グラッドストーンが構想するようになったのは、バトラーの神学思想の影響によってであった。神は褒賞と懲罰の

体系によって世界を統治しているが、これは、原罪を持つ個人が信仰を通じて救われるように促される「神の救済の計画」であり「神の経済」であった（Hilton、1983、p. 48）。このようにグラッドストーンは考え、労働者階級の人々によって構成される「神の経済」が神の道徳的統治によって動かされるべきであると主張したのである。バトラーの『宗教の類比』によれば、神の道徳的統治は、正しい人に褒賞を与え、邪悪な人に懲罰を与えることによって行使されており、我々はすべてそのような神の道徳的統治下に置かれている。我々の将来の幸不幸は、我々の現在の行為の善悪に従って、神によって定められているのであり、そのような摂理の原理によって、神は世界を統治していると主張された（Butler、2006、pp. 167, 169, 171, 174）。

グラッドストーンは神の道徳的統治をそのように構想したが、なかでもグラッドストーンにとって特に重要であったのは、行為という言葉であった。神は、行為の結果を予見する能力を我々に与えており（Butler、2006、p. 167）、我々が行為するように常に我々に要求している。行為は、単なる肉体的機能の発露ではなく、我々が責任を負うべき一連の過程であり、我々は我々の行為から導かれる結果に常にさらされているから、我々の行為に責任を持たなければならない。なかでも、グラッドストーンにとって最も責任が重大な行為の場所は、政治であった。政治家は、神の道徳的統治を実現するために、自らの行為の責任を負わなければならない。それゆえ、グラッドストーンは行為こそが自由党の根本方針であると主張したのである（Hilton、1983、p. 38）。

(3) 国内外における自由主義的統治

それでは、グラッドストーンは、こうした神の道徳的統治を実現するために国内外においていかなる自由主義的政策を試みたのであろうか。

グラッドストーンが国内で実行した自由主義的政策のなかで特に重要なものは、選挙法改正であった。それは個人の良心に基づく行為を政治に取り込もうとするグラッドストンの神学的動機に導かれた政策であった。例えば、グラッドストーンは1864年以降の時期に第二次選挙法改正を推進するようになったが、それは福音主義によって規律化された都市熟練労働者に対して選挙権を与え、彼らを政治的に統合する試みであった(Hilton, 1983, p. 32)。グラッドストーンは熟練労働者のなかでも最も数が多かった非国教徒の人々を特に重視するようになり(Parry, 1986, p. 167)、彼らを自由主義的に統治するようになった。こうして、非国教徒はグラッドストンの自由主義の基盤と見做されるようになった(Schreuder, 1979, p. 124)。グラッドストーンは、非国教徒の人々が持つ福音主義的情熱を評価し、それを政治的に利用しようと試みたが(Parry, 1986, p. 163; Schreuder, 1979, p. 124)、それは人間を規律化して労働者化する福音主義イデオロギーと、労働者階級の人々によって構成される「神の経済」を重視したからであった。グラッドストーンが構想した自由主義的で民主主義的な国家は、こうした福音主義イデオロギーに基づくものであったのである。

一方、グラッドストーンは国外ではいかなる自由主義的政策を試みていたのだろうか。グラッドストーンが抱いた帝国観は自由主義的なものであった。それは「自由に成長する共同体」であり、武力によってではなく、「自由意志」に基づいて自発的な政治的結合関係を維持し、危機の際にはイギリスが防衛すべきものであった。イギリス移民によって建設されたカナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカのような高度に「文明化」された定住植民地(settler colonies)に対しては、責任政府を与えて自治を認め、分離独立させたが、それは定住植民地の住民が既に

プロテスタント的良心を持っていると考えられたからであった。また、そのような定住植民地の分離独立は帝国の解体に至るものではないと考えられた。なぜなら、定住植民地の住民は血縁、言語、宗教の共通性に基づく感情的紐帯をイギリス本国との間に保持していたから、そうした定住植民地を分離独立させても、イギリス本国との間の感情的紐帯は消滅せず、緊密な家族的結合が維持されると考えられたからである。一方、その他の東洋やアフリカの植民地には、異民族が多く、彼らはまだプロテスタント的良心を保持していないと考えられた。そうした「文明化」が遅れた植民地に対しては、「文明化の使命」が強調され、イギリス本国との感情的紐帯が形成されて自治が可能となるまで異民族を教導することが強調された。そのためのイギリス支配(「道徳的信託統治(moral trusteeship)」)が認められるようになったのである。

確かにグラッドストーンは19世紀末のアフリカ分割に対しては慎重であり、アフリカの植民地化がイギリス本国の財政的負担になることを恐れていた。とはいえ、それはアフリカに対する帝国主義的介入を妨げるものではなかった。その具体例としては、グラッドストーンによるエジプト介入(1882年)を想起するだけで十分であろう。1870年代のエジプトは英仏の投機家たちの活動によって膨大な外債を抱えるようになり、国家財政が破綻するようになっていた。しかし、グラッドストーンは、エジプトの財政破綻の原因が英仏の投機家たちの活動にあるとは考えず、むしろ当時のエジプト副王イスマーイール・パシャが個人収入と国家収入を区別せずに専制的支配を続け、エジプトの財政破綻を招くようになったと考えた。つまり、イスマーイール・パシャが、「文明化」されず、道徳的に墮落していたことが、エジプトの財政破綻の原因と考えられ、それに対する「文明化の使命」が強調されるようになったのである。さらに、

エジプトの財政破綻を憂えたエジプトの民族主義者のアラビー・パシャが1881年にエジプトで軍事的クーデターを起こすと、グラッドストンは、アラビー・パシャもイスマーイル・パシャと同様に財政規律という道徳的素質を持たないと考え、外債の保護とスエズ運河の防衛を目的としてエジプトに対する帝国主義的介入を正当化するようになった（竹内，2015，pp. 50-51; Schreuder, 1979, pp. 98-100）。つまり、グラッドストンは、アフリカの異民族に対するプロテスタント的良心の育成には積極的であり、そのために必要であれば、「文明化の使命」を強調し、神の道徳的統治を可能にするための帝国主義的介入を推進したのである。

5 おわりに

本稿で明らかになったことをまとめておこう。

まず強調すべきなのは、ジェントルマン・エリートであったグラッドストンが自由主義的政策転換を行った原因が福音主義、とりわけジョセフ・バトラー主教の神学思想にあった点である。グラッドストンは『教会との関係における国家』のなかで彼の高教会主義的理想を展開し、国家が英国教会という良心を持つべきこと、そして個人は英国教会と融合することによって良心を与えられると主張したが、その考えはメイヌース学院事件によって崩壊した。その際に、グラッドストンが目にしたのが『宗教の類比』に代表されるジョセフ・バトラーの著作であった。バトラーはすべての個人が良心を持つという福音主義的教義を主張し、神はその個人の行為の善悪に従って褒賞と懲罰を与えると考えた。グラッドストンは、このバトラーの神の道徳的統治という考えを現実政治に適用し、神の摂理に裏づけられた自由主義的統治を行おうとしたのである。

このグラッドストンの自由主義的統治は、福音主義によって規律づけられた個人の自由意志と、それに対する神の道徳的統治、すなわち神の摂理を重視するものであった。この神の道徳的統治を実現するために、グラッドストンは彼の自由主義的統治、つまり選挙法改正、定住植民地の自治、異民族に対する帝国主義的介入を行った。

ただし、ここでグラッドストンが強調した良心を持つ個人とは、プロテスタント的良心を持つイギリス人や、定住植民地に移住したイギリス移民であり、東洋やアフリカの異民族は含まれていなかった点には注意が必要であろう。そうした異民族に対しては「文明化の使命」が主張され、異民族がプロテスタント的良心を持つように教導することが試みられたのである。

また、本稿では、ジェントルマン・エリートであったグラッドストンが福音主義の影響を受け続けていたことも明らかとなった。グラッドストンは幼少期の福音主義を拒絶して高教会主義を信奉するようになったが、それはグラッドストンがジェントルマン理念と同化したことを意味していた。しかし、彼はその後も引き続き福音主義の影響を保持し、その結果、自由主義的政策転換も行った。グラッドストンが高教会主義と福音主義を両立できた理由は、彼が信奉した聖アウグスティヌスの教義にあった。聖アウグスティヌスの教義は高教会主義と福音主義の源流と言える古典的教義であり、グラッドストンは聖アウグスティヌスの教義を受容することによって、高教会主義と福音主義の対立を克服し、「カトリック的福音主義」という新たな神学的立場を維持することができたのである。

以上、本稿では、グラッドストンの神学思想と自由主義的統治が密接に関連していたことを彼の思想的変遷の具体的過程に即して明らかにした。しかし、彼の自由主義的統治の具体的諸相については、個々の文脈に即して、

十分な考察ができなかった。その点の詳細な分析については、さらに実証的に解明されるべきであろう。今後の課題にしたい。

(参考文献)

- 板橋重夫 (1986) 『イギリス道徳感覚学派—成立史序説—』北樹出版。
- 植木幹雄 (1980a) 「バトラー研究—バトラーの倫理学説 (1) —」『北海学園大学 学園論集』第 36 号, pp. 51-74.
- (1980b) 「バトラー研究—バトラーの倫理学説 (1) の続き—」『北海学園大学 学園論集』第 37 号, pp. 1-24.
- (1985) 「バトラー主教—その生涯・誕生から青年期まで—」『北海学園大学 学園論集』第 52 号, pp. 111-127.
- (1986a) 「バトラー主教—その生涯・青年期から壮年期まで—」『北海学園大学 学園論集』第 53 号, pp. 81-97.
- (1986b) 「バトラー主教—その生涯・壮年期から死まで—」『北海学園大学 学園論集』第 54 号, pp. 133-150.
- ウェスレー, ジョン (大宮溥訳) (1974) 「説教 金銭の使い方」『現代キリスト教思想叢書 4 ウェスレーキリスト者の完全 説教 3 篇 フォーサイス キリストの働き』白水社, pp. 179-197.
- ヴェーバー, マックス (大塚久雄訳) (1989) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店。
- エドワーズ, ジョナサン (飯島徹訳) (1991) 『怒れる神の御手の中にある罪人 説教 申命記 32 章 35 節』CLC 出版。
- 尾鍋輝彦 (2018) 『最高の議会人 グラッドストーン』清水書院。
- 神川信彦 (2011) 『グラッドストーン 政治における使命感』吉田書店。
- 佐々木純枝 (1993) 『モラル・フィロソフィの系譜学』勁草書房。
- 竹内真人 (2015) 「宗教と帝国の関係史—福音主義と自由主義的帝国主義—」『社会経済史学』第 80 巻, 第 4 号, pp. 37-52.
- 柘植尚則 (2016) 『良心の興亡—近代イギリス道徳哲学研究—』山川出版社。
- トムスン, エドワード・P (市橋秀夫・芳賀健一訳) (2003) 『イングランド労働者階級の形成』青弓社。
- 行安茂編 (1999) 『近代イギリス倫理学と宗教—バトラーとシジウィック—』晃洋書房。
- Bebbington, D. W. (1989) *Evangelicalism in Modern Britain: A History from the 1730s to the 1980s*, Abingdon, Oxon, and New York: Routledge.
- (2004) *The Mind of Gladstone: Religion, Homer, and Politics*, Oxford: Oxford University Press.
- Butler, J. (2006) *The Analogy of Religion, Natural and Revealed, to the Constitution and Course of Nature*, in David E. White (ed.), *The Works of Bishop Butler*, Rochester, New York, and Woodbridge, Suffolk: University of Rochester Press.
- Butler, P. (1982) *Gladstone: Church, State, and Tractarianism: A Study of His Religious Ideas and Attitudes, 1809-1859*, Oxford: Clarendon Press.
- Ditchfield, G. M. (1998) *The Evangelical Revival*, Abingdon, Oxon, and New York: Routledge.
- Gladstone, W. E. (1839) *The State in its Relations with the Church*, 3rd edition, London: John Murray.

- (1896) *Studies Subsidiary to the Works of Bishop Butler*, Oxford: Clarendon Press.
- Hilton, B. (1983) “Gladstone’s Theological Politics,” in M. Bentley and J. Stevenson (eds.), *High and Low Politics in Modern Britain: Ten Studies*, Oxford: Clarendon Press, pp. 28-57.
- (1986) *The Age of Atonement: The Influence of Evangelicalism on Social and Economic Thought, 1785-1865*, Oxford: Clarendon Press.
- Jenkins, R. (1995) *Gladstone*, London: Pan Books.
- Matthew, H. C. G. (1997) *Gladstone: 1809-1898*, Oxford: Oxford University Press.
- Parry, J. P. (1986) *Democracy and Religion: Gladstone and the Liberal Party, 1867-1875*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Schreuder, D. (1979) “Gladstone and the Conscience of the State,” in P. Marsh (ed.), *The Conscience of the Victorian State*, Syracuse, New York: Syracuse University Press, pp. 73-134.
- Stephen, M. D. (1961) “Liberty, Church and State: Gladstone’s Relations with Manning and Acton, 1832-70,” *Journal of Religious History*, Vol. 1, No. 4, pp. 217-232.

(Abstract)

William Ewart Gladstone was British leading politician in the nineteenth century and a person who tried to reflect Christian theology in his politics. This article analyzes Gladstone’s theological thought to consider why he attempted a liberal shift in his policy and what his liberal governance was. Gladstone moved from Evangelicalism in his childhood to High Churchmanship and wrote *The State in its Relations with the Church*. But he continued to be influenced by Evangelicalism. He accepted the dogmas of Augustinian orthodoxy and became remarkably close to “Catholic Evangelicalism”. After Maynooth, Gladstone was influenced by Bishop Joseph Butler’s Evangelical dogmas and attempted a liberal shift in his policy. Gladstone tried to actualize “moral government of God” which Bishop Butler had demonstrated. This article argues that Gladstone’s liberal governance stressed individual conscience and was based on Bishop Butler’s “God’s providence” in the course of which God governs the world by a system of rewards and punishments.

